

文化財を活用した地域振興 in 北陸 －第23回中部社研時事フォーラム－

文化財は、地域固有の歴史、人々の暮らし、そして自然環境である風土が密接に関わりながら育まれ、形成されてきた貴重な財産である。しかし、多くの文化財は維持、修繕費用の枯渇や継承者不足などの課題を抱え、滅失、散逸のリスクにさらされている。

このため文化財を「保存」するだけでなく、その価値を積極的に「活用」していく内容の政策変換が図られ、各地で文化財を観光やまちづくりに活用する取り組みが行われている。

今回、文化財の活用による地域振興に焦点をあてたフォーラムを北陸で開催したため以下のとおり報告する（事務局）

I. 基調講演 「文化と観光とまちづくりのよき関係について」

文化庁文化観光推進コーディネーター

丸岡 直樹 氏



2015年 バリューマネジメント
株式会社入社
2017年 観光庁観光資源課出向
（～2019年）
2021年 文化庁出向 文化観光推進コー
ディネーター
2024年 立命館大学 大学院観光MBA
客員准教授（兼任）

1. 文化と観光それぞれの視点

文化庁文化観光推進コーディネーターの丸岡と申します。今、文化庁と紹介いただきましたが、もともと民間にも所属していました、端的に言うと、文化庁と民間に所属しながら、大学教員もさせていただいている三足のわらじで、最近、自分の社団法人もつくりましたので、四足のわらじで活動させていただいている。

今、複雑な社会課題に向き合う上で、行政だけ、民間だけでやることも難しく、それぞれの良さを生かしながら両者をつないでいく役割が重要だと思っています。文化庁からお声がけをいただき、文化観光推進コーディネーターという役職を新たにつくっていただき、活動しています。

年間250日ぐらい出張をしており、ずっと各地を走り回りながら、地域とよき関係を築けるよう

に努めています。

まず、今日の基調講演でお伝えしたいのは、「視点」という言葉になります。視点とは、どの立場から物事を見るかということです。文化と観光とまちづくり、それぞれ考えることも違えば、倫理観も違うと思います。それぞれの立場に立って、視点を切り替えながら、それぞれの良さを生かしていくことが大切だと思っています（図1）。

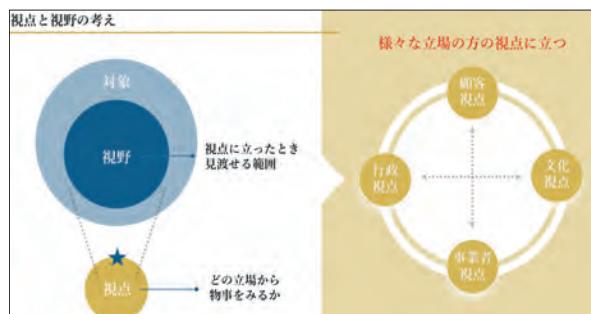


図1 視点と視野の考え方

文化と観光とまちづくりを語るときは、皆さん、ご自身の視点で見えているところの解像度は高かったりするのですが、そうではない領域はどうしても抜け落ちてしまうので、全体像をつかんで活動を進めていくことが重要だと思います。是非ほかの人の視点に立って物事を捉えていただければと思います。

文化財は国の宝であり、地域の宝でもあり、未来の人たちにとっても宝だと思います。今まで、

例えば江戸時代は名家の方々が残す努力をされて、その後は行政のお金、つまり税金から価値があるという理由でお金を回してきましたが、人口減少、少子高齢化の中、限界が来ていると思います。文化庁もまさに文化財を保存するという概念から、保存のために活用するという概念にかじを切っていますが、その際に注目されるの「観光」という切り口になります。

地域に人が減ってしまったら、どれだけあがいてもその中で動くお金は減りますが、外から来る人たちにお金を落としていただけたら、地域にお金が流れてくるではないか。今までの日本はどちらかというと、メーカーが製品を輸出することによって、外からお金が入ってくるという輸出型であったと思うのですが、外貨獲得の手段として、外から来ていただいて、お金を落としてもらう観光が注目されるようになりました。特に文化財は地域らしさであったり、ほかの地域にはないものだからこそ、観光とともに相性が良くて、観光が注目されるようになりました。

ですが、観光はやはりビジネスですから、顧客の満足をつくる必要があります。一方で、文化財や地域の宝は地域側の気持ちもとても大切ですし、行政が扱うことが多く、行政の視点も必要です。観光においては「稼げること」や「お客様に喜んでもらうこと」が価値となる一方で、文化だったり、地域側からすると、「大切にされること」や「正確に情報が伝わること」が価値だというふうに、立場により相違がったりします。お互いに「この場所を良くしたい」「この場所をいろんな人に大切にしてほしい」という思いのはずなのに、それ違うことが本当に多いので、両者をつなぐことが大切だと思います。

図2は奈良で出土した火熨斗（ひのし）という道具で、重要文化財です。これでは価値は伝わらないと思います。例えば、文化側の方々、すごく歴史に詳しい方々は「古墳時代の火熨斗の出土例は2点しかなく、これは古墳に埋められていたものですが、副葬品も中国や西アジア由来の珍しいものがあって、棺の中の人物は冠や指輪、ガラス

玉などの豪華な海外製の装飾品を身につけています。2点しかないから、価値があるのです」と一生懸命説明されるのですが、この説明を聞いても価値が伝わりません。

図2 地域の文化を伝えることのむずかしさ

でも、この価値を伝えるときに、民間や観光側の人たちが力になると、いろいろな伝え方があると思います。例えば「火熨斗って何なの?」と問われたときに、「実は古代のアイロンなのです。アイロンが出土するということはどういうことか」というと、昔の人の美意識にも服がパリッとしていること、しわがなく、ピシッとしていることが美しいという価値観があったということなのですよ。1500年以上前の人たちと現代人の美的感覚が一緒なのかもしれない。それを証明できたのはこの火熨斗のおかげです。その人が身にまとうものは美意識が高いということなのですよ。皆さん、自分のお葬式のときにアイロンを入れますか。入れないですよね?でも、この人は美意識が高いから、アイロンを入れるし、そのときに大切にしていたネックレスとかも入れるし、本当に美に対して感度が高い人だったのです。王様の美意識が高いってすごくないですか。例えば市長とか、総理大臣とかが身だしなみがすごくて、まとっているもの一つ一つに意味があって、それぐらいやり切っていたというなんことですよ。すごくないですか?みたいに説明されると、より伝わりやすいかもしれません。これが「視点」の重要性だと思います。

逆に、観光側の人たちが文化の深掘りもせずに、「これ、重要文化財なのです」だけしか言わなかつたら、それもまた失礼だと思うのです。「何が価

値なの?」「いや、重要文化財です」としか言わなかったら、その場所やものの価値は伝わらないのです。

深掘る人も大切だけど、深掘った内容をただそのまま伝えて伝わらないので、お客様側の視点に立って価値を転換する人の役割も重要なと思います。この意味で文化側と観光側、両者が手を取りることが文化と観光のまちづくりにおいては大切だと思います。

2. 文化財とは

「文化財とは何か」を改めてご紹介させていただきます。厳密な定義はありますが、ご参加の方は普段から行政文書を読まれる機会は少ないと想いますので、厳格な定義よりも柔らかい伝え方をさせてください。文化財とは、人類の遺産で不変の価値です。過去においても価値があるし、未来にとっても価値があるものです。ですが、社会は日々揺らぐもので、あるとき「大切だ」と言われたものが、あるときは「要らない」と言われるなど、世の中には、はやりと廃りがったりします(図3)。



図3 文化財とは (1)

今でこそ「重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）」に選ばれているようなところは「美しい」と言ってくださる方も多いですが、昭和のころなどは「恥ずかしい」と言われていたりしていたのです。「いまだに古臭い建物に住んでいるのだね」などと言われたりしたようです。そ

のため外側だけ、建物の入り口だけをコンクリートで固める看板建築がはやるぐらい、「最新のものに住んだほうがいい。木造に住んでいるのはかっこ悪い」と言っていた時期もあります。車が普及したとき、「こんなに細い道じゃ無理だ。建物なんてつぶしてしまえ」、「美しい堀、水がきれいな堀も埋めてしまって、全部駐車場にしてしまおう」といった動きも数多くありました。

「今、振り返るともったいないよね」と言う方も多いのですが、当時は気づけないです。時代時代に様々な価値観があり、明治時代であれば廢仏毀釈みたいに、先祖が大切にしたものを感じてしまったり、そのようなことが繰り返されたのが文化財を取り巻く歴史だと思います。改めて意識したいことは、今残っている古民家や文化財は、かつての人たちが大切にしたものだということです。100年前の人たちが100年後にも残るようにと建物をつくっていなかったら、やはり残らないのです。その建物を誰かが継承して、名もない人たちが大切に磨いて、草が生えていたら抜いて、そんなふうにして残ってきたものが文化財だと思っています。この価値は今の世代だけで消費していくものではなく、未来に渡していくことが大切だと思っています。

同時に、未来のためのものだから、今使ってはいけないことはないと思います。過去に大切だったし、未来でも大切だろうし、今も大切だが、大切だからゆえに永遠に箱の中にしまうのではなく、今の人たちも価値を感じて、自分たちの心を豊か

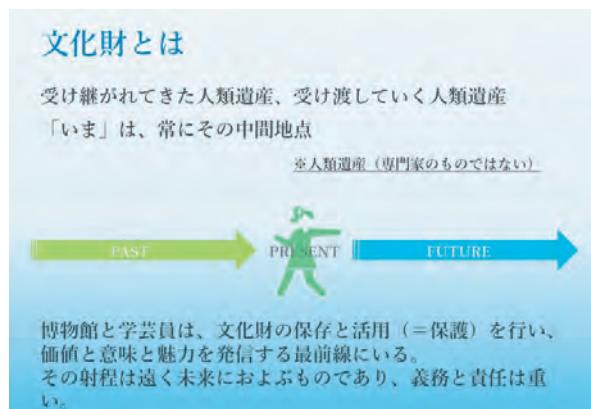


図4 文化財とは (2)

にして、その価値を感じたうえで未来に継承していくのが、文化財とのよき関わり方でないかと思っています（図4）。

3. 文化観光という考え方

文化財を生かしていくために、「文化観光」という施策を文化庁で進めています。

今まで文化財関係の施策は文化財保護を優先してきた背景があります。時代の中で大切にされないシーンが多かったのです。例えばバブル真っ盛りのとき、皆さんが大都会の中で「どんどんお金があるぞ。もっと新しいことをやろう。世界一高い建物をつくろう」と言っていた時代、文化財は注目されないです。「壊そう」とか、「うちにももっと映えるものを置こう」みたいな動きがありました。それに対して必死に守ることをやってきたのが、正直、今までの「保護・保全しよう」という動きの強さだったと思います。

例えば重伝建地区ですが、この制度ができた当初の重伝建地区の五カ条、七カ条みたいなものは、「貸さない」、「壊させない」、「汚させない」などのメッセージが多かったように思います。それぐらい当時は多くの人たちが大切だと思ってくれない時代だったのだと思います。しかし時代が変わり、令和になると、「地域らしさって大切だよね」とか、「地域を象徴する文化財って価値があるよね」と思ってくださる方が本当に増えたと思っています。

そうなってくれば、増えてきた文化財を大切にしようという機運が高まりました。ただ、税金で保全することが限界であれば、文化財をいい意味で使おう。破壊するのではなく、活用することによって価値を知ってもらい、価値を知つてもらうからお金が還元される。そんな関係性をつくりたいと考え、文化芸術基本法の改正・改称、文化財保護法の改正、そして、文化観光推進法の制定と、私たちは観光を1つの切り口に文化財政策の転換を進めてまいりました（図5）。



図5 文化財政策の転換

文化庁の中で、文化観光推進法という「観光」という言葉が入る法律をつくるのは大きな流れの転換でした。法律をつくるのは大変ですが、これにより確実に推進させるという姿勢と、予算と活動をつくるというコミットメントになると思います。

法律を読むのは難しいので、2つに絞らせていただきます。

1つ目は、文化についての理解を深められる観光であること。これこそが文化観光です。2つ目は、文化への再投資・好循環を行うのが文化観光だとしています。

まず、1つ目、文化についての理解を深めることのできる観光というのは、文化側に対してのメッセージでもありますし、観光側に対しても伝えているメッセージです。文化側に伝えることとしては、先ほどの例のように、専門的な知識をひたすら伝えていくことは観光には合わないということです。専門家同士の会話だとすごく合うのですが、それを分かりやすく伝えていく、知識がない方でも理解できるかたちにしていく、そんな配慮が必要だというメッセージです。

逆に観光側に伝えているメッセージとしては、ただ写真がきれいに撮れたら良い、SNSに上げられたら良いではなく、地域の方々が大切にしている思いや本質的価値みたいなものを少しでも伝える努力をしてほしいというメッセージです。あと、明らかに間違ったもの、忍者や侍がいたことになっているみたいな建物が結構多かったり、観光客はどうせ分からないだろうというかたちで伝

えることは観光客に失礼だと思うのです。しっかりと価値を伝える努力と一緒にしましょうというのが、文化観光の考え方の1つ目です（図6）。



図6 文化観光について（1）

2つ目は、文化への再投資・好循環です。観光といったら、自然とか、食とか、文化だとか言っていたただくのですが、いざ観光客に来ていただいて、お金を落とすとなったときに、その文化の担い手や建物に還元が少なかったりするのです。分かりやすい例でいうと棚田です。美しい棚田の景色は日本の原風景といわれ、美しいなと心が動く方々もいる。それを見にわざわざ行かれる方々もいる。でも、車を飛ばして行って、バーッと見て行ったときに、1円でも農家さんにお金が落ちるかというと、落ちないです。その景色を守るために、守るためというか、それを継承して、棚田を耕し、あぜ道を丁寧に管理されている方々にお金は行かないのです。多くの人が来ることで道が壊れてしまったり、ゴミを捨てていく人がいたり、むしろマイナスになってしまったりする。これはいくら棚田の農家さんが努力をしても、変えられないことだと思うのです。文化の担い手や文化財の保有者だけで考えるのではなく、そこを仕組みとして解決していくデザインが必要だというのが文化観光の考え方の2つ目になります。

棚田の見える場所でカフェを営んで、そこで棚田米を召し上がっていただくとか、それによって還元していく仕組みを作るとかです。

分かりやすい例でいうと、例えば京都の仏壇屋

さんに技術を見たいと来る人たちがいる。でも、観光客は仏壇なんて買わないのです。ただ接客だけさせられて、去っていくという構造だったりする。それだと、搾取になってしまふと思います。

経済側は強い立場であり、お客様を連れてきてくれる存在だと思います。それはとても重要なですが、同時に未来への持続性を考えて、文化の担い手たちにもお金が回る仕組みを是非併せて作っていただければと思います（図7）。

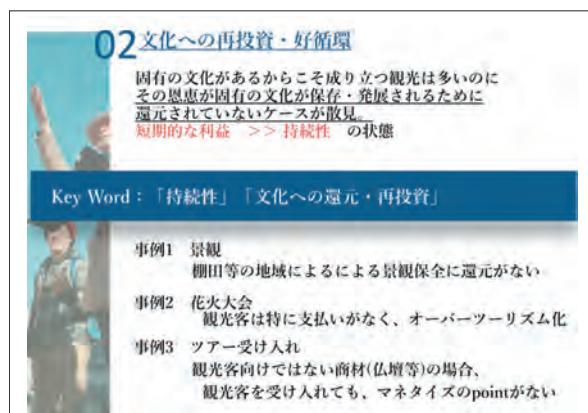


図7 文化観光について（2）

こんな思いで文化を保存・活用していく。活用することによって、「文化はただそれだけで価値がある」ではなく、いい意味で価値転換されることによって、観光客の満足度につながる。その満足に対して喜んでお金を払っていただく。払っていただいたお金がまた文化や地域に還元されていく。この好循環のデザインを私たちはしていきたいと思っています。その中で、民間の方と一緒に



図8 文化観光について（3）

行くプロジェクトをさせていただいたり、文化観光という形で予算化して、さまざまな問題解決に取り組んだりさせていただいている（図8）。

他の省庁の話になりますが、観光庁も地域側にとって観光が価値あるものにしようという取り組みをされています。図9は「持続可能な観光ガイドライン」です。今まで観光客がどれだけ来るか、日本に落ちるお金はどれぐらいか、消費額みたいなところにフォーカスが当たっていたのですが、持続可能な観光まちづくりをすることを観光庁として、政策で本当に大切な成果目標として置いてくださるようになっています。

観光側が観光だけで終わるのではなく、観光というパワーを使って地域を良くしようという動きが出てきていることを補足してお伝えさせていただきます。



図9 持続可能な観光ガイドライン

4. 地域の特色を生かした施策を

これは文化観光を越えたお話になるのですが、1つだけ勝手に「絵の具理論」と呼んでいるものをお紹介させてください。世の中にある成功事例といわれるものをただ物まねしてもうまくいかないということです。

例えば黄色の場所があります。黄色の土地があります。その場所が一生懸命考えて、青色の施策を打ちました。青色の施策を打った結果、美しい緑色になった。この緑がすばらしいと皆さんが言つたとします。この青色の施策を打てば、どんなも

のも美しい緑になると思いがちで、あちこちで「青色を入れよう。そして、緑にしよう」となるのですが、赤色の場所に青色を入れたら、紫になってしまいます。「あれ？求めていた色と全然違った」みたいになるのです。

絵の具はそうだろうと言われるのですが、地域振興だと、施策A（青色）を信じすぎてしまうところがあると思います。そもそも赤色の土地だったら、どう考えても、緑にはならないのです。赤色は赤色できれいがあるので、無理に緑を目指す必要はないのではないかと私は思います。

何か新しいことをご自身のところで行おうと思うとき、そもそも地域の色は何色なのだっけ？と深掘ることが大切だと思いますし、そして、どんな状態になりたいの？という理想像も大切です。最後に、その差分を埋めるにはどんな施策が合うのだろう？という感じで考えたほうがいいと思います（図10）。

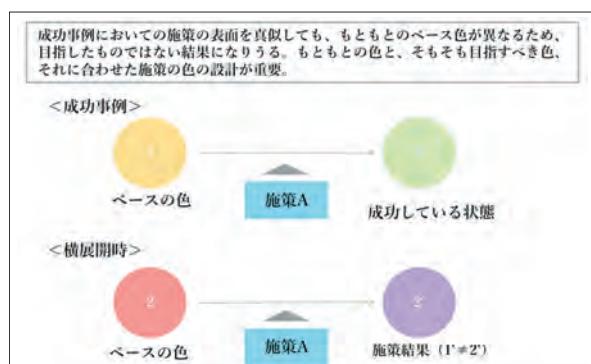


図10 絵の具理論

これは、観光の場合も同様です。観光はすべての地域において何でも解決できる打ち出の小槌ではないし、中には観光ではない施策のほうが合うところもあると思いますが、観光という施策はある程度地域ごとに、地域らしさにカスタマイズできるのではないかと思っています。何か導入してみようと思うときには、青色をちゃんと学んでいただくことはもちろん、そもそも自分たちがどういう存在かということをぜひご確認いただければと強く思っています。

5. 変わらないために、変わる

特に地域で大切な文化財などを持っている方々がいれば、「変わらないために、変わる」ことを伝えさせていただきたいです（図11）。「これは40年間守ってきた場所だ」、「これは先祖から引き継いできた大切な場所なのだ」などと考えがちになるかもしれません。でも大切にする仕方が、「ただ誰にも触れさせないこと」ではなくなってきているのではないかと思います。観光や経済に携っている方には、お金もうけは重要であるが、素晴らしいことを一緒に協業して価値を残そうしてくれる人もいます。そういった方々とコラボレーションしていくことがこれからは必要だと思っています。

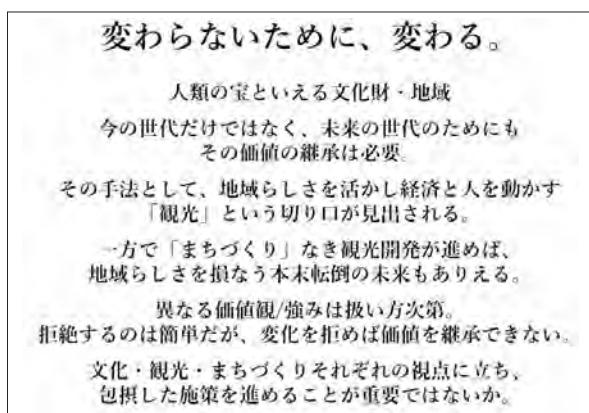


図11 まとめ

文化財を大切にしている人には、「お金を稼ぐことは悪だ。なぜなら自分たちは自腹を切ってきましたから」と言う方がいらっしゃるのですが、経済が続いていかなければ、本当の意味の持続性はつくれないので、きちんと稼いでいくことにもポジティブであってほしいです。同時に、そのお金の流れ方、さっき言ったような循環の仕組みを意識してもらえると、より文化と観光のよき関係が築けるのではないかと思います。

逆に、経済側、観光側の方々にお伝えしたいことですが、地域らしさを生かし、経済や人を動かす観光は非常に大きな武器だと思いますが、同時に、観光は力があるが故に、破壊にもつながりか

ねません。私の知っている地域でも、「この場所を盛り上げたい。文化財を活用したい」と言って、お客さまが使いやすいようにと思っているうちに、結局全部を解体してしまって、古い木として骨組みだけを使いますとか、ほかの場所に持ち去ってしまうみたいなことが結構起きています。それは一生懸命これを生かせないかと思った結果かもしれないですが、どんどん破壊が進んでしまったりもするのです。

地域らしさが1つの観光の武器である以上、地域らしさを損なうものではなく、地域らしさを生かすためのお金の流れ方まで一緒にデザインをしていただければうれしいと思っています。

異なる価値観や強みは扱い方次第だと思います。「そんなのはほかの勝手だ」と拒絶するのは簡単ですが、それらをいかに取り入れて、自身の地域の特色に合わせて加工していくか、そんな視点を皆様には持っていたら良いと思います。文化と観光とまちづくり、それぞれの視点に立ち、包摂するような考え方を持っていただければうれしく思います。ご清聴ありがとうございました。

II. 事例紹介1 「旅人と地域をつなぐ金沢町家宿の取り組み」

国登録文化財 金沢町家・ゲストハウスあかつき屋代表

堀田 哲弘 氏



1982年 株式会社北國新聞入社
（～1998年）
1998年 北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科入学（～2000
年）
2000年 財団法人地域振興研究所
入所（～2010年）
2011年 国登録有形文化財 金沢町家
あかつき屋代表

1. 金沢町家を宿泊拠点に

こんにちは。この町家宿を始めるにあたっての、これまでの私の人生の歩み、プロフィールを語らないわけにはいかないと思うので、まず初めにお話しさせていただきます。私は大学を出た後、金沢に本社があります地元新聞社で報道の仕事を16年間してきました。その後、報道という立場だけではなく、地域に対して何らかの方向づけなり、提案の仕事ができないかとの思いから、地元の大学院大学に入学し2年間、公共政策を中心に勉強をしました。その後、地元のシンクタンクで10年ほど仕事をさせていただき、2011年から現在のゲストハウス・あかつき屋の仕事をしています。先ほどの丸岡様のお話にもありましたように、地域の文化的、歴史的な資源を活用して地域の活性化等に貢献できないかという考え方から、古民家を探し、金沢市の町家バンクを通じて見つけました。そこでの暮らしぶりが分かったことや、その物件が偶然新聞社時代の非常に敬愛する大先輩の家であったことも相まって、この歴史的な建物を大切に残して活用していくという思いがさらに深りました。

ゲストハウスの立ち上げは、15年ほど前の話ですが、その概念やあり方がよく分かっていなかったので、宿泊施設という立場で活用していくという、ざくっとした考えで始めました。食事提供はしませんが、金沢には夜の飲食店もたくさんあ

りますので、あまり心配は要らないだろうとの想いで始めたわけです。建物を改装していく中で、地元の建築家の方や工務店の方から「この建物は非常にいい建物ですよ」という話をよく聞きました。金沢市には町家の保全と活用の補助制度がありましたので、それを利用することになりました。当時の建築関係の部署の方からも「これは非常にいい建物です。残されることを歓迎します」ということで、結果的に補助制度を活用させていただくことになりました。

事業を始めるにあたって、3つ経営方針を立てました。1つ目は、あかつき屋を簡易宿所として活用し、国内外の観光客に快適な金沢町家体験を提供すること（宿泊事業）、2つ目は、あかつき屋を拠点に、地域の観光資源・観光人材の発掘に努め、新しい旅行商品を提案・実施すること（旅行事業）、3つ目は、町家の保存、伝統文化の継承、地域社会の活性化など、地域が抱える諸課題の解決に努め、金沢SDGsツーリズムの推進に尽力することです。この経営方針の3本柱で今、事業を行っています。その結果、2023年から2025年までの3年間、金沢市から金沢SDGsツーリズム推進事業者の認定をいただいている。この建物は、昭和8年（1933年）の建物ですから、築92年ぐらいです。金沢にはこれよりも古い町家はたくさんあるのですが、非常に保存状態が良く、デザイン性が優れているという点で高く評価いただいている。銅板葺きの小屋根が曲線を描いていま

I 宿泊施設の概況

(1) 建築物

- ・建築年：昭和8年（1933年）
- ・構造：木造2階建て、桟瓦葺き
- ・開業：2011年1月
- ・国登録有形文化財に指定：2012年
- ・特長：①保存状態の良さ ②優れたデザイン性



銅板葺きの小屋根



玄関の優美な円窓

図12 あかつき屋の概況

す。玄関から入ってすぐに円窓があるなど、非常にデザインを意識した造りになっています（図12）。

2011年開業の段階で文化庁の調査官の方が来られて調査された結果、翌2012年に国の登録有形文化財の指定を受けています。客室は2階に、10畳間と6畳間2室の計3室あります。6畳間は窓を開けると丘陵部にある兼六園が見えるので、「兼六の間」と名付けた部屋があります。

1階はコミュニティルーム、7.5畳です。この利活用がお客さんに非常に喜ばれています。天井が高いのも部屋の造りとしての特徴です（図13）。



図13 あかつき屋内観

図14は庭です。10年ほど空き家でしたので、雑草などが生え、手入れが行き届いていない状態だったのですが、草をむしったり、コケを移植したりして、結構きれいになりました。春はツツジが美しいし、夏はギボウシの花が咲きます。秋はキンモクセイが咲きます。冬は雪吊りがあります。

お庭を目当てに、お嬢さん方が着物姿で時々来られます。大変うれしいことです。この若い女性



図14 あかつき屋の庭

の方々は成人式の前撮りに来たいということで、知り合いの方から頼まれて場所を提供したという経緯があります。

2. 地域の傾向やお客さまについて

あかつき屋の立地は、小立野寺院群の一角で、下町風情が残っています。兼六園の東側、歩いて10分ほどですが、金沢駅や繁華街、香林坊、片町、武蔵からは少し離れています。道を挟んで広済寺という浄土真宗のお寺があります。そういう立地で宿として運営していくかとずいぶん心配されたのですが、私はあまり意識しなかったのです。兼六園は近いですが、ひがし茶屋街や近江町などからはちょっと離れた立地にあります（図15）。



図15 あかつき屋の立地

この地域は兼六小学校の学区になっていますが、昔からの町で過疎化、高齢化が進んでいます。北陸新幹線が2015年に開業して、まち全体が活発になっているという印象があるのですが、兼六園にも近いのに、ちょっと寂しい状況になっているのです。つい数年前には小学校の統廃合がありました。空き家の増加、町家の消失が起こり、それらは駐車場や新築住宅などになってきています。

私どもがあかつき屋を始めた時は、いろいろなお店があったのですが、ここ十数年の間に貴重なお店が姿を消していっています。図16のお店もお寿司とおでんの両方を食べられる居酒屋だったのですが、5年ほど前に店主の体調不良で廃業されました。このお客さんは台湾の方々です。店主ご

夫妻が非常にフレンドリーに接してくださって、私のほうとしては大変ありがたかったです。こういう大事なお店が1つ消え、また1つ消えというのが今の私たちも周辺の状況です。

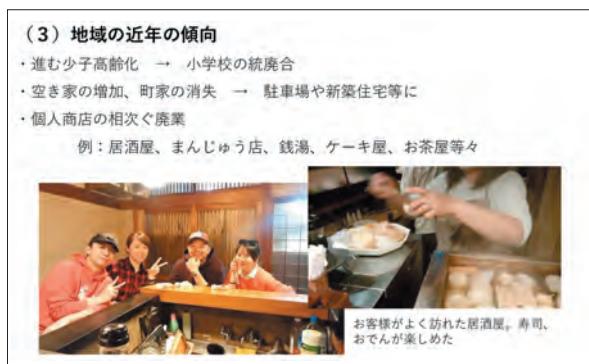


図16 地域の近年の傾向

宿泊客の傾向ですが、私どものお宿は駅から離れていて、バスに乗って来ないといけないので、交通の便にちょっと難点があるのですが、良質な金沢町家に泊まりたい人が結構いらっしゃって、そういうことで少しフィルタリングがかかるのですか、お客様は建築家やアーティストがすごく多いのです。

3. 旅人と地域をつなぐプラットホームの役割

あかつき屋の具体的な取り組みをご説明します。視点としては、国の登録文化財のあかつき屋は、単体ではなく、1つの象徴的な存在であるということで、お客様には周辺地域、環境と一体となつたおもてなしやサービスを提供させていただいています。具体的にはあかつき屋界隈のまち歩きなどを実施しています。まちの様子は年ごとに変わっているのですが、金沢町家が点在しています。個人商店も幾つかあります。金沢で最も古い現役のパン屋さんは創業100年以上たっているという話です。ドジョウのかば焼き屋さんという個人商店もあります。金沢ならではの家並みがあります。黒瓦の屋根、雪吊り、融雪装置、お庭等、人々の暮らしの息遣い、営みを知ってもらいたいという

のが私どもの基本的な考え方です。



図17 宿泊者への街歩き案内

図17の左上の写真は金沢で最も古い現役のパン屋さんです。金沢町家の造りをしています。右上の写真はドジョウのかば焼き屋さん、浅田さんです。私がお店とお宿をつなぐときは、単に地図をお渡しするだけではないのです。まち歩きで一緒に伴って歩いています。左下の写真は黒瓦の屋根の雪景色です。雪吊りがあります。まちなかをご案内する中でご紹介しています。右下の写真など東京とか、暖かいところから来た人たちは、雪を溶かす融雪装置なども珍しく見ておられます。先ほどのおでんとお寿司の居酒屋さんも、外国人の方だったら、直接そのお店まで赴いて、お店とつないでいます。地図を渡して、「行ってください」ということはほぼしていません。一緒に行って、「よろしくお願いします」と紹介させていただいている。

図18の左上、下の写真は7.5畳の1階のコミュニティスペースですが、中部の国立大学の学生さんが観光心理学を勉強するということで、まちなかでフィールドワークする拠点として使われました。東京の私立大学の研究室は学生さんとともにあかつき屋の界隈をフィールドワークして、この地域の発展策を調べ、道を挟んだお向かいのお寺で発表されました。京都の私立大学の生活デザインなどを研究される学生さんは、卒業研究の勉強会でコミュニティルームを使われています。計画行政学会中部支部の研究活動の一環として、私が自治体とか、いろんな研究機関とつないだり

ということもしています。



図18 宿を拠点とした学習、研究活動支援

お宿を拠点とした活動の支援ということでは、うちのお客さんはどういうわけかアーティストの方が多いため、写真家の作品を玄関から入ってすぐの上がりの間に展示させていただいている。彩りと新鮮さを加えていただいているのではないかと思います。そのほか、小学校の算数スクールの先生方がここで勉強会をした後、お鍋で懇親会をされた。私は驚いたのですが、何年か前、大阪の若者グループがここを2晩貸し切りで、日中はボードゲームを楽しんで、夜は鍋料理で団らんするという過ごし方をされました。

私どもは地域と連携、地域に元気を与えるれば良いこれまで取り組んできましたが、金沢市の金沢SDGsツーリズム、SDGsを基礎にした観光の活性化、観光振興を図っていこうという理念と合致しまして、2023年、24年、25年に推進事業者の認定を受けました。(図19)「地域の文化や経済を守ろう」とか、「地域コミュニティや自然に敬意を払おう」とか、そういう理念が私どもの取

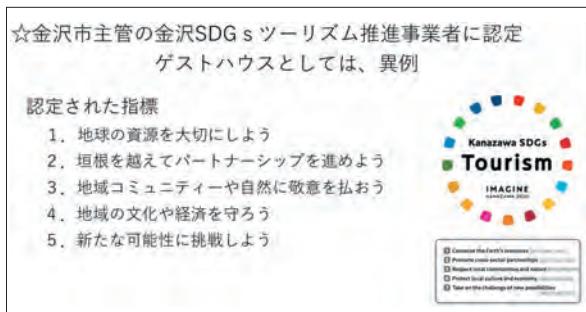


図19 金沢SDGsツーリズム推進事業者に認定

り組みと合致したということです。SDGsを目指して特別に何かをしたわけではありません。

4. 開業からの15年を振り返って

今年、おかげさまで創業15周年を迎え、3年ほど前から旅行業を立ち上げました。先ほどの話ではないですが、文化観光に石川県は力を入れています。その文化観光の事業にこちらから提案しまして、庭園文化観光を打ち出しました。お庭を貴重な造園・歴史文化資産として評価および啓発、普及させ、それにあわせて庭園観光を推進しようということです。小松の苔の里や、山中温泉の古びた、ちょっと廃旅館みたいなところのお庭が最近、再生されたので、そこを訪ねるツアーを作りました。庭師さんにスポットを当てたことは、庭師さんならではの経験や見方を話してくださいまして、大変好評でした。

お宿は1つのスポット、点的な存在ですが、地域空間を立体的にとらえ、そこにどういう要素があるのか、どういう人たちの活動や思いがあるのかということで、人への関心、人に対するリスペクトを総合的に系統立てた旅といいますか、滞在、ステイをつくり上げていくという立場に立っています。単にお宿業だけをやっているという意識はございません。最初から今日までこういう立場でやっています。

金沢市には、ひがし茶屋街や武家屋敷などグレードは高くない地域もきちんと評価して残していくという「こまちなみ」という条例があります。皆さん、あまりご存じないのですが、面的に歴史的な文化的な空間として良好な状態で残っているので、そういうことにも目を向けて、お客様方に紹介しています。

まだ道半ばですが、私どもがやっているところをご紹介させていただきました。ありがとうございました。

III. 事例紹介2 「つくる人をつくる～日本遺産からはじまった井波のあらたなまちづくり～」

一般社団法人ジソウラボ代表

島田 優平 氏



林業事業者、富山県庁勤務を経て、
2008年家業の株式会社島田木材入社
現在 代表取締役社長
2019年 井波日本遺産推進協議会ワーキンググループ 座長
2020年 一般社団法人ジソウラボを設立、代表理事

1. 歴史のまち日本遺産井波

皆さん、こんにちは。一般社団法人ジソウラボの代表理事島田です。井波のまちは2018年に日本遺産の認定を受けました（図20）。それから日本遺産をもとに新しいまちづくりをしてきたのかなと感じています。話の主な内容は人づくりです。井波のまちは人口減少していきます。いろんなものはあるが、それを誰が活用して、誰が運営していくの、という人の問題を解決しなければなりません。文化財に限らず、いろんなものを守るには人がいなければどうしようもないという理由で、私たちは人づくりの仕掛けづくりを行っています。

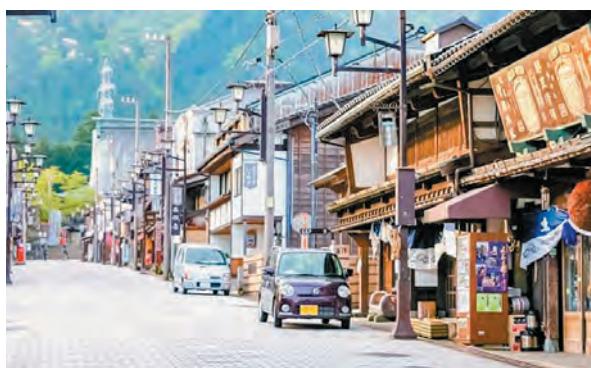


図20 日本遺産井波の町並

まず自己紹介をさせてください。私は南砺市井波に生まれて育ち、一度東京に行きましたが、や

はりふるさとで自分の役割を果たしたいと帰ってきました。県庁に勤めて、少し公共的な立場を経験させてもらいましたが、民間で何ができるかということで、今のまちづくりの活動をさせていただいている。本業は林業です。

まちに人がいなくて、いろんな役割をひとり何役も担わないといけないのですが、自分ひとりでは限界があるので、会社とか組織をつくりながら、井波のいろいろなものを守っていく仕組みをつくっています。会社・団体を仲間たちと立ち上げ、その1つとしてジソウラボという団体を立ち上げて活動しています。私のルーツは五箇山^(※1)にあります。日本遺産は何か物に対して認定するよりも、そのストーリー性を認定して、それをどのように生かすかというところで事業としてつくり上げられます。井波の歴史をたどっていくと、五箇山との歴史がどうしても関わってきます。私の先祖は五箇山でして、井波とのつながりが昔からあることを知るにつけて、井波のまちを放っておけないと取り組みにより力が入ります。瑞泉寺の再建にも何十代の前の先祖が関わって、木材を提供してきたという記録が残っているので、やはり他人事ではないなと感じます。

まちづくりの中で文化財を保護していくにしても、経済面が重要で、産業でまちを支えていかないといけないと思っています。これは今に始まった話ではありません。井波には630年の歴史があるのですが、五箇山の塩硝の富が井波のまちに落ち、その力で文化力がついてきたという歴史があります（図21）。今後も経済力、産業力といった力がなければ、まちを維持していけないということを基本的な考え方として持っています。今後のまちづくりの取り組みとして、ウイスキー樽づくりを最近行っています。昔の伝統文化、技術を守るだけではもはや限界が来ていると感じています。

井波というまちは、合併したときは人口1万

(※1) 富山県南砺市南部の山間部にある合掌造り集落の総称。世界遺産に登録されている。

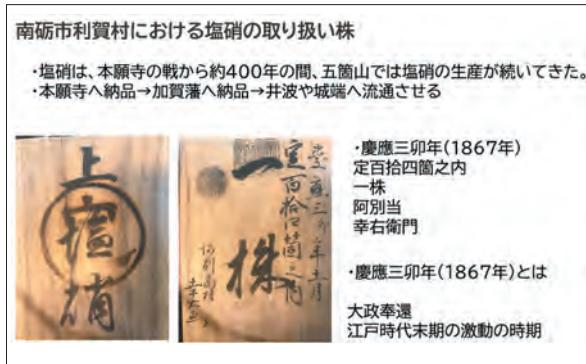


図21 塩硝の取り扱い株

2,000人でした。20年たって、今、7,600人のまちになりました。あと30年ぐらいたと、5,000人になるといわれていますが、私たちのまちづくりの取り組みを行っていけば、5,000人になっても、8,000人のまちの規模を維持できるのではないかという感覚があります。

今の私たちの取り組みがさらに広がると、井波の人口そのものではなく、井波に関わっている関係人口のまちへの関わり方次第で、まちを守れるのではないかという感覚です。このため、人口減ということについては全然悲観していません。空き家ができると私たちは悲観していくなくて、むしろ空き家をどう生かそうかという考え方になっています。このような活動で、このまちを守っていけるのではないかと思っていますし、そのように630年間、井波のまちは守られてきたのではないかと思います。

まちおこしの取り組みは、日本遺産認定がきっかけですが、もともとの素地も重要だと思っています。井波のまちの特徴というと、大工の技と井波彫刻。この2つをしっかり大事にしながら新しく発展させていけるかが重要です（図22）。実際に目に見えるもの、お寺や建築物がまだあるわけですから、この目に見えるものが失われると、いよいよ危ないなと私たちも思っています。目に見えるものをちゃんと残していくかどうか、そこにどう人が関わるかどうかを大切にしたいと思っています。

図23、図24は大正時代の写真ですが、先人も同じような風景をずっと残してくれているので、私

たちもそれを確実に継承し、つなげていくことが重要です。ほかのまちは結構近代化して、商店街ができたりしています。私が小さいときは、井波のまちは取り残されているまちかな？と思っていたのですが、むしろ今は重要な場所だと考えています。都市化が進めば進むほど、私たちのまちの価値が出てくるという価値観を持っています。

日本遺産になったとき、私も含めて若い当時



図22 井波の歴史と風土



図23 井波の風景（左大正時代、右現代）(1)

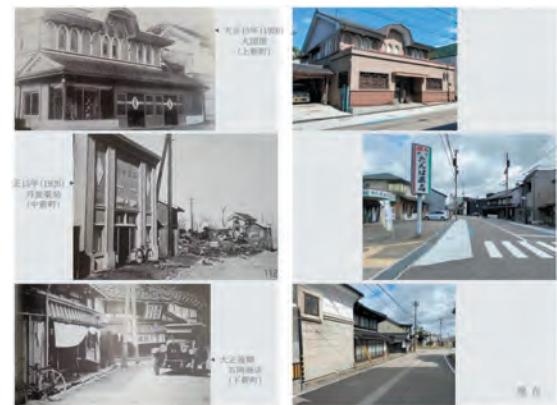


図24 井波の風景（左大正時代、右現代）(2)

30代、40代の人たちが、このまちを何とかして継承していくかといけないと思ったのが、まちづくりにおいて一番良かったと思います。2017年、18年当時はコロナ前ですが、地域の雰囲気は落ち込んでいて、「市町村合併したけど、良くなっていないな」というような暗い話がありました。年配の方に疲れ気味感があったのか、若い人たち中心で「まちづくりをちゃんとしよう」「地域のことを考えよう」と話し合いました。2018年の日本遺産をきっかけに、そういう話ができたことで、私たちはジソウラボという団体を立ち上げるに至りました。このときに年配の方々、私たち若い人がまちのことを語れなかったら、たぶん今はなかつたと思います。そのときに年配の方々から「このまちを何とかしてみろ」というメッセージをいただき、そのプレッシャーの中で、私たち若い人たちが中心になって「まちをどうしていこうか」と自分たちで考えて、行動するというステージがあつたのです。日本遺産の事業をきっかけにジソウラボが誕生し、若手が自分たちで考えて、行動するといったことのくり返しが、現在につながっているかなと思います。

2. 人づくりでまちづくり

日本遺産は文化庁の事業でしたので、いろんな専門家の方の派遣もいただきました。どうしてもハード事業的な思考になりますが、日本遺産はソフト事業で行ってほしいとのことでしたので、井波のまちの価値を見直しました。その際アドバイザーの方が「井波のまちはすばらしい。彫刻職人が1ヶ所に150人、200人も集まっているのは、世界中に井波しかないよ」とおっしゃったのです。「世界でも類を見ないまちだとしたら、これはまだまだやれる」と、自分たちが気づけなかった価値を外部の方に気づかせていただいたのもモチベーション維持の上で良かったと思います。

井波町史を見ると深い歴史があって、井波の630年の歴史の中で3度の大火に遭ったが復興し、まちづくりをしてきたという歴史が残っているので

す。このまちも人さえつないでいければ、立ち直っていけるのではないかと考えています。長い歴史でそれが証明されています。一方、産業はどんどん廃れていっています。井波は100年前ぐらいから大きな工場や企業を誘致してまちづくりをしてきたのですが、今、そういった企業が撤退して、非常に大きな穴がまちの中に空こうとしています。時代とともに状況は変わってきているので、産業をどのように育てるかということを今、私たちは考えています。

図25のように町宿が井波にできて、今、8棟あります。これまでまちで泊まる人は少なかったのですが、宿泊ができると、人が集まり始めます。人が集まったときに、今度は商売を起こす「人」が必要ということで、私たちは人づくりの取り組みを行っています。人を生み出すことは、まちづくりには絶対必要です。地元の人間だけでまちを支えるのはやはり難しいので、どのように外の人を呼び込み、中の人と一緒にまちづくりができるか。更には中の人になってもらうというサイクルを作る必要があると思っています。井波というまちには、過去に外部から人が来て何かのアクションを起こして、それが現在も残っているという歴史が繰り返されています。その現代版のサイクルをつくっていきたいと思っています。井波彫刻もその一つです。前川三四郎という方が230年前に京都から来て、井波彫刻を伝えて、今、200人の彫刻師が生まれているのです。私たちが考えているのは、こういう源泉になれるような「生み出す人」を何人つくるか。これが今後地域を活性化

近年、古民家がまち宿に改修されている。

井波の宿泊客は、推定1日50名は宿泊できる地域になっている。



図25 古民家を活用した井波のまち宿

させる勝負のポイントになるのではないかと思っています。そういうわけで私たちは源泉になれる人をつくる取り組みをしています（図26）。



図26 源泉となる人材

一人では何もできないので、ジソウラボという団体を設立し活動しています。ジソウラボの活動でつくり出した人を外部へ送り出して、井波のファンを外でつくって、そのファンの方々がまた井波を訪れる。人を送り出し、また戻してくる仕組みをつくる。ジソウラボはそのような活動を行う人づくりを行っています。

活動の一例を紹介します。井波にパン屋さんがなかったので、「空き家を活用してパン屋さんをやりませんか」とインターネットで募集したら、2週間で「井波でパン屋さんがしたい」という人が来ました。また、井波は交通の便が非常に悪いので、「交通の仕組みと一緒に考えましょう」と募集したら、東京から二地域居住で、「移動の取り組みがしたい」という人が現れました。彫刻の糸鋸師という職人さんがいません。大事な職人さんを育てようというと募集したら、京都から学生が「卒業したら、井波で職人になりたい」と来てくれました。コーヒー屋さんを募集したら、富山から来てくれました。ビール屋さんを募集したら、2か月で「やりたい」と来てくれました（図27）。彫刻の地域商社を募集したら、地元から東京に出た女の子が「ふるさとで事業をしたい」と来てくれました。ジソウラボで具体的な事例を挙げて、「井波の空き家とか、そういったものを活用して事業をやりませんか」と募集したら、意外と早く

2、3か月でマッチングできて、事業を行っていただいています。



図27 空き家でビール屋を起業した例

新しく事業を始めてくれた方々に井波にずっと住んでもらうということも大事ですが、「彫刻のまち井波」が100年後ぐらいには「コーヒーのまち井波」と呼ばれてもいいのではないか、あるいは「パンのまち井波」と呼ばれてもいいのではないかと思います。いろんな可能性をつくりながら、しかし軸にあるものだけはしっかりと残そう、そういういた仕掛けづくりをこのチームで行いたいと考えて活動しています。

ジソウラボのほかにも人づくりのためのチームが設立されています。個人で何かを自分でやるのは非常に難しい時代なので、チームをつくって、チームごとに取り組みをしていく。外から来た人はなかなか地域になじめないので、私たちはジソウラボというチームをつくって、地域になじんでもらえるように伴走支援していく。資金や投資という支援ではなく、精神的な支えとして外から来

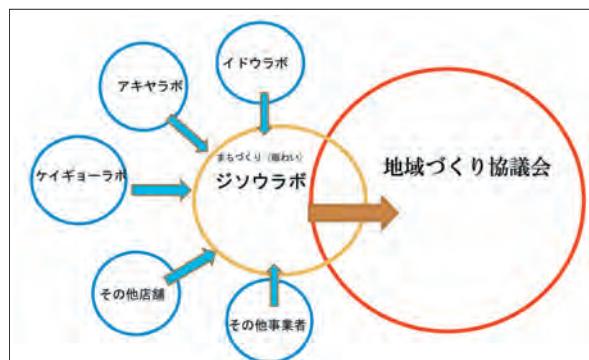


図28 井波のまちの人づくりチーム

る人たちを応援していくことを行っています（図28）。

3. 100年後の将来にむけて

現在もいろいろな募集しています。2020年に法人を設立して、この事業をしたら、コロナ禍だったので、都会から「地域で仕事をしたい」という問い合わせがすごくあって大盛況だったのですが、今はもう皆さん、東京に戻っているというか、都会を離れたくない人が多く、私たちの募集も、残念ながら、ほとんど響かなくなりました。「事業は都会でやりたい」と思っている人が多い中で、どのように私たちが地域の魅力をつくれるか、新たなチャレンジが必要と感じています。

一方で、私たちは外から来た人ばかりに注力して呼び込んでいたのですが、今では地元の人たちが「自分たちで何かをしないといけない」と、お店や会社をつくるようになりました。おかげで、2017年から23年までの7年間で、半径500mぐらいの井波のまちの中だけで42軒、2025年の現在は60軒ぐらいの空き家がお店や事業所に生まれ変わっています（図29）。裏を返せば、それだけ空き家がまちの中で発生しているという危機的な状況ではあるのですが、それをうまく活用できていると思っています。



図29 井波まちなか空き家・空店舗再生MAP

地図を見てわかるように、直系1km程度の円内に集中的に店が集まっていますが、これはとても重要だと思っています。私たちは、歩いて楽しめるまちづくりを目指しています。散居村みたいに少し離れていると、いくら良い店があっても、車でその店に行って終わりになってしまうのですが、4店くらい良い店をつくれば、歩いて回遊して、お金を落してくれるのではないかと考えています。

コーヒー屋さんがいい例です。井波の観光客は年間5、6万人程度だと思いますが、コーヒー店だけで年間1万4,000人ぐらいのお客さんを呼んでくれる。そうすると、その周りにお店ができてくるのです。「飲食のほかに服屋さんとか、そういうものを出したいわ」とか。

お店ができると、高齢者しか歩いていなかったまちを若い人たちが歩き始めます。そうすると、若い人たちのカルチャーとか、活動が生まれ、それが将来につながっていくと思います。若い人たちをこのまちにどのように関わらせるかということ、事業を井波で行ってもらう仕組みをつくりながら、まちづくりの活動を行っています。

空き家を事業所とすることなどで、井波に関わる人が増えてきています。「人がいない、いない」と言っていたのに、若い人たちが徐々に増えて、まちの担い手になってきてくれているという、今、井波の中で起こっていることを紹介させていただきました。ありがとうございました。

IV. 事例紹介3 「石川県七尾市 歴史的建造物やまち並みを生かした取り組み」

岡田翔太郎建築デザイン事務所商事合同会社

岡田 翔太郎 氏



- 2014年 岡田翔太郎建築デザイン事務所商事合同会社を設立、代表就任
- 2015年 Under 35 Architects Exhibition (35歳以下の若手建築家による建築の展覧会) 出展
- 2018年 いしかわインテリアデザイン賞2018 石川県知事賞、金沢市長賞受賞
- 2024年 NPO一本杉通りの文化遺産を守る会理事

1. 能登半島地震の発災

七尾市を拠点に活動する建築士の岡田と申します。七尾で、歴史建造物の修復をメインとした復興活動についてお話しさせていただきます。

まず、自己紹介からさせてください。私は石川県七尾市で生まれ育ちました。大学で4年間建築を学んで、地元である七尾市に戻り、事務所を立ち上げました。それから約10年たったときに能登半島地震が発災し、今は復興活動一色という状況です。震災の年に「NPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会」を設立し、今年、2025年には「一人一花in能登半島実行委員会」を立ち上げて、復興活動をしています。

2024年1月1日に起きた能登半島地震の際に、七尾市の埋め立て地にある道の駅に、帰省していた友人と一緒にいました。16時10分ぐらいに、今までに経験したことのない大きな揺れを感じまし



図30 能登半島地震の被害（七尾市）

た。埋め立て地でしたので、辺りで地割れが起きて、割れた地面から腰高ぐらいの高さまで泥水が吹き上げる本当に異様な状況だったのを今でも覚えています。周りの鉄筋コンクリート造の建物、3階建て、4階建ての建物が左右に大きく揺れていました。鉄筋コンクリート造はこんなに柔らかい構造だったのかと感じたことを覚えています（図30）。

その後、大津波警報が鳴ったので、急いで家に戻り、家族と山に車で避難しました。市民が一斉に車で避難したため交通渋滞が起き、パニックが起きていました。夜8時半ぐらいに大津波警報が解除された段階で家族と避難所に行き、2晩を過ごしました。余震が怖かったため、昼間のみ自宅を兼ねる仕事場に戻り、片付けをしました。発災直後に大学の恩師からLINEで「大丈夫か」という連絡をいただいていたのですが、私自身に余裕がなく、1月3日になってようやく「大丈夫です」と返事をしました。そうしたら、「明日すぐに支援物資を持って行きます」と連絡をくださいり、1月4日には名古屋から支援物資をたくさん積んで来てくださいました。私のためだけではなく、「地域の方々にこの物資を配りなさい」と、地域の皆さんのこととも一緒に考えてくださいました。がれき処理の手伝いなどをすると中で、尊敬する先生の「ボランティア活動も大事だが、建築士として地元にきちんと貢献しなさい」という言葉が心に響き、地域の復興活動を開始したという次第です。

図31は一本杉通り商店街という500mぐらいある商店街の地図です。私の事務所はこの通りにあります。色のついた「建06」とか、「街06」というマークは、1年半における建築の復興活動や街の復興活動を図示しているものです。

まちに多くの空き地ができているので、空き地に何をつくっていくべきか、あるいはどのように暫定利用していくかを考えるワークショップを開催したり、「一人一花」という空き地にお花を植

一本杉通りの復興デザイン <ひと・まち・建築を繋ぐ複層的な設計>

能登半島地震によって被災した石川県七尾市の中心市街地にある一本杉通り商店街を再生する一連のプロジェクト。

私はこの地で生まれ育ち、被災した。発災からこの一年半、地域の建築事務所として被災者個々の住まいや生業再建の相談に応えてきた。それと同時に、まちのこの先がわからぬながらに、とにかく“いま”必要とされるまちの復興活動に継続して取り組んできた。

まちの復興活動のために必要な“デザイン”と被災者のための個々の“建築の設計”が同時進行する中で、

次第に復興した先の未来を描くことよりも、どんな復興過程を歩むことができるかを大切に考えたいと思うようになつた。

そして、地域自らが主体的に復興過程を歩むことを目指して、私も議論に加わり、「一本杉通りの復興方針」が被災

地域による自主的な復興まちづくりの議論が形となった「一本杉通りの復興方針」と、再建を誓う被災者個々の生業

ひと・まち・建築を繋ぐ複層的な設計を実践し、まちの再生を目指す。

解体空き地を活用した
新規開発地

静岡空き地を活用した
「出会いの一本杉ガーデン」 街07

A stylized illustration of a city skyline. The buildings are rendered in a light grey color with dark grey shadows, giving them a three-dimensional appearance. In the foreground, there is a large, bright yellow shape that resembles a rising sun or a stylized letter 'E'. The background features a light blue sky with some wispy clouds.

This image shows a detailed view of a building's exterior wall. A blue hexagonal panel is attached to the wall, featuring the white text '街08'. A yellow vertical pipe runs along the wall next to the panel. The wall itself is made of light-colored concrete blocks.

A screenshot from a Japanese mobile game showing a city map with buildings and a green signpost labeled "街06".

A close-up photograph of a hexagonal crystal specimen, possibly tourmaline, showing its characteristic prism and pyramidal faces. A small blue rectangular label is attached to the bottom right corner of the crystal.

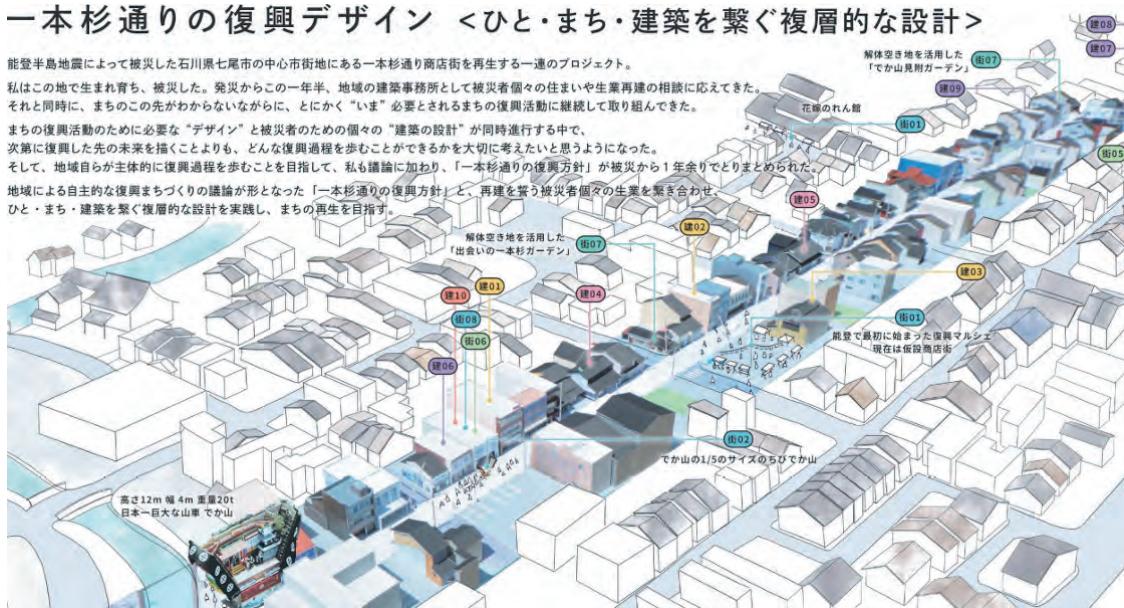


図31 一本杉通りの復興活動

えていく活動を行ったりしました。将来的には建物が建つののがベストですが、暫定的にお花を植えて、まちの再生につなげていこうというものです。多くの復興活動に関わってきましたが、まちのデザインと建築の設計を複層的にどちらもフラットに行なうことが、これからの中にとって重要なと考えています。図32は地域の方々と、これからの中の復興、まちづくりの方針を決めたものです。

実現のための5つの方針

一本杉通りの魅力とこれから懸念されることを踏まえ、
自慢や実績を実現するための5つの方針を設定します。
これは、一本杉通りに暮らす私たちが取り組むことと、
行政機関や御城内地域づくり協議会を始めとする、
様々な方々との協働で取り組むことの、
具体的な内容を挙げています。

方針2 いろんな「屋」のふだんの魅力と
ハレの日の魅力とを届ける

方針3 チャレンジを応援して
目的地となる“お店”を増やす

方針4 まちの「復興」を外にひらく

方針5 井戸端のある町、災害に常に備える町

図32 一本杉通りの復興方針

この方針を基本としながら、まちぐるみで様々な活動を展開しています。また、個別の建物の修復などを実施しています。商店街の中で被災した事業者さんの建物再建の設計などを私の会社でも行っていますが、修復している間にお隣の建物が壊れたり、本当にいろいろ想定しない出来事が起こってきます。

2. 一本杉通りの文化遺産を守る会の活動

「NPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会」についてご説明します。文化遺産の保存活動を行うワールド・モニュメント財団のワールド・モニュメント・ウォッチの支援先として、七尾一本杉通りが選定されました。この支援先の選定をきっかけとして、地域の方々と共に一本杉通りの歴史的な建物とまちなみを守るNPO法人を立ち上げ、2027年にかけて、登録有形文化財4件の修復を支援していきます。また、イベント開催を通じ七尾一本杉通りを広くアピールし、支援の輪を広げるとともに一本杉通りへの来訪につなげることを目指していきます。

2024年5月から9月に「一本杉通りの模型制作プロジェクト」を開催しました。1月の発災直後は、自分たち自身のなりわいや暮らしに手いっぱいで、まちのことを考える余裕がなかったのですが、3月頃から「これから商店街をどうしようか」という声が徐々に聞こえました。「まちをどうしていくか」という議論を加速させるために、一本杉通りの復元模型を作成したら良いのではと考え、50分の1の商店街模型をつくることにしました。SNSを通じて全国の建築系の学生に発信したと

ころ、延べ60人程度の学生が全国から集まり、約半年をかけて一本杉通りの復元模型をつくりました（図33）。



図33 一本杉通りの模型制作プロジェクト

2024年11月には、「空想の空き地ワークショップ」を開催しました。解体空き地がまちなかに増え、雑草などが生えると、まちが廃れていく要因となるので、暫定的に何かに利用できないか考えるワークショップです。子どもたちも多く参加し、自分のまちを楽しみながらでも良いので、考えるきっかけづくりを目指して開催しました。

2025年1月には、「能登半島の被災文化遺産」がワールド・モニュメント財団の文化遺産リストに選定されました。今後「NPO法人一本杉通りの文化遺産を守る会」は図34に示す方針に基づき活動していきます。

NPOはワールド・モニュメント財団の文化財

1. 復興経験の共有
東日本大震災被災地の「気仙沼風待ち復興検討会」「小野川と佐原のまちなみを考える会」の代表者にお越し頂き経験の共有、意見交換会など実施します。
2. 歴史的建造物修復技術の共有
確かな技術や知見と経験を有する専門家にお越し頂き、技術指導・アドバイス／町並み保存のレクチャー／ワークショップなどを予定しています。
3. 歴史的まち並みの景観検討
一本杉通りの模型を使って考える、明日の歴史的街並み景観方針策定会議を予定しています。
4. 歴史的まち並みをみんなで歩こう！歴史的建造物ツアーア
七尾まちなかの歴史的建造物を巡るツアーを開催します。建築家、建築史家など建築に関わる専門家の目線でガイドを行います。外部向け、地元子供たち向けなど検討中です。「歴史的建造物Open Week」のように定期化し、オープントしてくれる建物を毎年増やしていく試みです。

図34 一本杉通りの文化遺産を守る会の活動方針

復興プログラムの支援のもと、図35に示す4件の文化遺産の修復をしていきます。左上は和ろうそくのお店で、明治43年の建築です。明治38年に七尾市内で大火があった後に建てられた七尾町家です。右上はお醤油屋さんです。明治41年に建てられ、一本杉通りで最も大きい間口を持っている重厚な店構えの建築です。左下は旧上野啓文堂です。昭和7年、万年筆専門店として建設されました。万年筆の形態を造形化したユニークな外観をもつ建築です。右下は創業大正元年のお醤油屋さんです。明治期に建設され、平成29年に国登録有形文化財として登録されました。この4件のうち、私の会社は2件の修復設計を担当しています。



図35 修復する4件の歴史的建造物

3. 歴史的建造物の復旧

図36は先ほどの和ろうそくのお店です。地震発生から1週間ぐらいの写真です。大きくこの建物の下屋が倒壊し、母屋は残ったのですが、60cmぐらい隣地側に斜めに傾斜しています。放っておくと、二次倒壊する可能性がありましたので、震災から約1週間後に大工さんと現場に入り、応急補強をしました。応急仮設の補強手法です。今回の地震で倒壊した建物の多くは、1階の柱が傾き、2階がスライドするようなかたちで倒壊しています。この建物は何とか持ちこたえていましたが、同様な状況でした。1階の傾いた柱の隣に1本、柱を添えるように立てます。なるべく多くの場所

で仮設の柱を立て、鉛直荷重を支え、補強した柱と柱の間に筋交いを入れます。そして根固めをして、柱頭・柱脚のところに金物を入れてさらに補強します。仮補強をしっかりし、安全を確保した上で、建物の詳細部分も含めた実測調査をしていました。



図36 和ろうそく店の震災直後の状況

実測調査を終えて、これから修復方針を検討していく段階になって、大きな問題に突き当たりました。

右上の平面図で、赤線点線で囲われた部分は今回倒壊した下屋の範囲です。この建物を修復する際、青色点線で囲われた部分は通り土間になっているのですが、通り土間をいったん解体する必要があることが判明しました。この通り土間をいったん解体してしまうと、増築扱いになる。増築扱いになると、確認申請が必要になります。こういった建物の文化財的な価値を損なわずに、現行法にのっとったかたちで確認申請を通していくのはほぼ不可能ですので、「文化財的価値を損なわずに、この建物を残せないか」と七尾市役所の都市建築の担当者と何度も話し合いをしました。

この話し合いを約1年行い、七尾市において建築基準法の適用除外ができるように、条例を制定することになりました。建築基準法は、「国民の生命、健康及び財産の保護」を図るため、建築物の地震に対する安全性や火災に対する安全性の確保など、「遵守すべき最低の基準」を定めています。歴史的建築物は、改修の際に、工事の内容等

によって、建築基準法の現行基準への全面的（あるいは部分的な）適合が求められる場合があります。そこで、歴史的建造物の活用に向けた条例の整備に動きました。国宝や重要文化財は自動的に適用除外にできます。国登録有形文化財の建物は、条例があれば、建築審査会にかけて適用除外とする方法があります。しかし、七尾市にはこの条例が無いため、（大多数の自治体は無い）、このたび七尾市は条例をつくったというのが経緯です（図37）。震災をきっかけにこのような条例ができるケースは少なく、気仙沼では国登録有形文化財を守るために、市指定の文化財に格上げをして適用除外にしました。気仙沼とは違う方法です。七尾市が震災から1年半というスピード感を持って条例を制定したのは、本当にすばらしいことだと感じています。

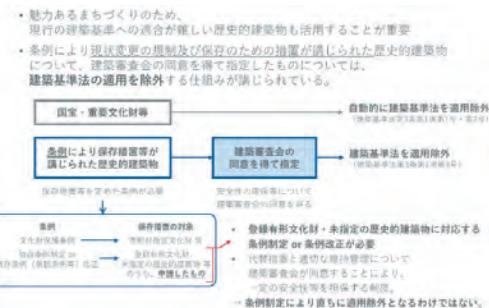


図37 文化財と建築基準法の関係

図38は、現在の和ろうそく屋さんの現場の様子です。現在も倒壊の危険性がある状況なので、きちんと仮補強を行いながら、構造部材の入れ替えなどを行い修復作業に当たっています。解体業者さんなどは全部一気に壊してしまうので、文化財



図38 和ろうそく店の解体の様子

ということもあり写真、図面など記録を取りながら慎重に解体している状況です。

4. 古さと新さが共存する魅力ある一本杉通りに

「一本杉通りの復興方針」の中に「明治から令和の家並みが息づく町」というものがあります。古いものはもちろん大事ですが、明治からの建物だけがある通りではありませんので、「明治から令和の家並みが息づく」、それぞれ違った家並みが続いていくのを大切にしていこうという考え方です。

図39左は、和ろうそく屋さんの完成予想図です。右は、私の会社が手がけている新築の建物になります。

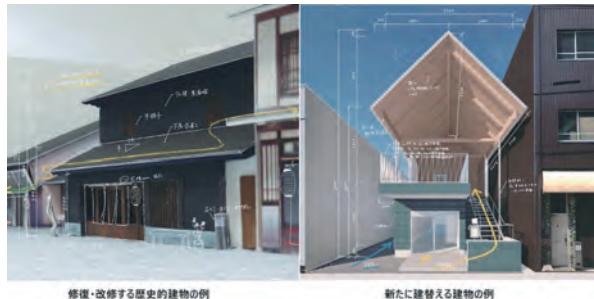


図39 修復する建物（左）・新たに建替える建物（右）

古いものはしっかりと残す必要があるし、今回の震災で新しく建て替えを余儀なくされた建物は、今の技術を使って、施主さんの思いやこのまちの場所性をくみ取りながら新しいものをつくって、有機的なまちを目指していく。これが一本杉通り商店街の魅力になるのではないかと考えています。ありがとうございました。

V. パネルディスカッション

[ファシリテーター] 愛知県立大学情報科学部 教授 小栗 宏次 氏

[パネラー] 丸岡 直樹 氏・堀田 哲弘 氏・島田 優平 氏・岡田 翔太郎 氏



1990年 名古屋工業大学大学院修了
(工学博士)
1998年 愛知県立大学 教授
2011年 東京大学 リサーチフェロー
2014年 名古屋大学 客員教授
2024年 愛知県立大学 文化財調査活用総合研究所

小栗：小栗でございます。最初に、私から講師の4人の先生方に1問ずつご質問をさせていただき、その後、会場の皆さんからご質問やコメントをいただきたいと思います。

小栗：まず、丸岡さんにお伺いします。

今日の丸岡さんのご講演とは直接関係ないかもしないが、民間から文化庁に入って仕事をされ

ていて、「文化庁、どうよ?」という話をちょっとだけ聞かせていただきたい。働きやすいとか。もっと言うと、先ほどの岡田さんの話とも関係するのですが、これから文化財の保存活用をやっていくときに、いろいろ戦わなければいけないことがあると思いますが、文化庁側が柔軟な対応ができるかどうかとかです。実際どうですか、文化庁で仕事をされていて。

丸岡：ありがとうございます。結論から言いますと、結構働きやすいです。もともと2年というお話だったのですが、気づけば5年目になります。

小栗：それは文化庁が逃がしてくれないので、それとも、結構楽しいからなのか。

丸岡：それは両方です。外から見たときはすごくお堅い役所に見えたのですが。ただ、中に入ってなぜ堅いのかが分かると、なるほどと思いました。その意味で、文化庁に入って良かったなと思っています。

文化庁の立場で言うと、皆さんが土足でいきなり入ってくるので、「それはびっくりするよね」と中に入って思いました。「ちゃんと玄関から入ってくれたら、ピンポンしてくれたら、意外とドアを開けるのに、みんな庭から入るから、それはブロックするよね」という感じです。

小栗：なるほど。ありがとうございます。

今度は、堀田さんへお伺いします。実際にあかつき屋を営業して15年目。この期間、ペイするのか、経営的にはどんな感じなのか、もうちょっと踏み込んでお話を聞けたらと思います。

堀田：これも私の報告の中で少し触れたいと思っていました。自営業は経営者の人件費が出ていないとよく言われますが、そのとおりです。私が始めたのが50過ぎ、51歳ぐらいからです。妻は常勤勤務でしたし、子どもはほぼ一人前になっていて、そういう部分の支出がなかったのも助かりました。何とか自分が元気で日々過ごせればいいなという思いで始めたのです。2011年、始めた当時は北陸新幹線の開業前夜というほどではなかったのですが、2015年開業の2年ほど前から結構ムードが盛り上がってき、開業前後3～4年はそれなりに

忙しい思いをさせていただきました。少し潤いがあるかなと思ったのですが、2020年にコロナがやってきたので、すっかり冬眠状態みたいになりました。今は、少し盛り返しているかなという状況です。大の大人が人並みの入会費、給料をいただくほどではないことは断言させていただきます。

小栗：誰か人を雇っていますか。

堀田：これもいろんなタイプがあって、私どもの仕事は人を雇うほどでもないし、基本的に週末にお客さんは来られるので、妻の助けも借りられます。そうして、何とかやってきたという感じです。

小栗：ご家族で運営されていたのですか。

堀田：そうです。人を雇ったことはこの15年間ありません。忙しいとき、お宿の中を走り回っていた時期もありました。1分1秒を争うような感じで。何とかやれたのですが、60歳も半ば過ぎになると、少ししんどくなってきました。

小栗：ガイドをされるというお話をありがとうございましたが、ガイド料をとっているのですか？

堀田：一切とっていません。全くボランティアで、地域の人と接してほしいという想いが強いのです。私はこれまでの仕事でいろいろと観光的なものを見てきましたが、旅は非日常です。大量生産で非常に画一的に商品を提供するのはいかがなものかと思います。インフォーマルで、カジュアルなかたちで金沢ステイをお客さんに楽しんでいただきたい。画一的で非常にステレオタイプなマニュアルにのっとったサービスをお客さんには味わってほしくないと最初から思っていて、まち歩きなり何なりして、思いがけない人と出会い、いろんな風景なりと出会っていただくのが旅のだいご味だと感じているので、その気持ちで動いています。

小栗：ありがとうございました。それでは、島田さんに質問です。文化財を守っていく中での人づくりは本当に核心だなと思ってお聞きしていました。いちばん大事なことです。人がなれば、文化財は当然守れません。人を呼ぶ、育てるにはポイントが何かきっとあると思います。島田さんの魅力もあるでしょうし、先ほど「つくる人をつくる」という話もありましたが、源泉となる人をう

まく呼んでくるとか、あると思うのです。しかし、これと同じことをほかの地域でまねしようと思つても、そんなに簡単にいかないと思います。ただでさえ日本中の人口が減っていますから。結構さらっとおっしゃったが、もうちょっと何かポイントがきっとあると思うのですがいかがでしょうか。

島田：期待的なことも込めて発表させていただきましたが、地域としては人口8,000人ぐらいですし、観光客もそんなに見込めるところではないですが、実際に事業者は「この井波の地で仕事をしたい」といらっしゃるのです。

そのポイントは、その人たちの個性というか、来たい人にとって、どういう自分の人生であり、生きがいがあり、達成したいかということに対する1つの場所として井波があるわけです。何か金もうけをしてやろうとか、観光業で何か一旗揚げてやろうとか、そういう方々が来ているというわけではないように感じます。もともとお寺が630年前に建った理由は、静かで修行に集中できるから。最初からにぎやかなところではないし、今も不便ですし、決して行きやすい場所でもないのですが、あえてその地で自分に挑戦したい。自分のものづくり、商品に対して挑戦したい。あと、おっしゃられたように、「この人と一緒に商売したい」というような人たちが、人が人を呼びというようななかたちかもしれません。ある意味途上でもありますし、私たちも「頑張って」とスタートするのですが、それが持続して商売としてやっていけるかどうかは、これからチャレンジ次第でもあります。有名ではないのですが、井波彫刻であったり、まち並みであったり、風情であったり、こういうものに引かれる方は間違いなく増えているので、今後、仕掛けをどうできるかというところにこのまちの可能性があると思います。

小栗：しっかりもうけようという感じではなく、井波の持っている潜在的なことにそもそも魅力を持って来ている。

島田：そうですね。井波彫刻士さんが150人ぐらいいるのですが、ひたすら彫刻をつくっていらっしゃる。その姿に心打たれる方々がいらっしゃる。

その雰囲気の中で自分もいたいというような、一種独特な世界です。

小栗：そうですか。オンリーワンの強みがあるわけですね。

島田：そう。強みを発揮したい方々が来ていらっしゃるなという印象はあります。

小栗：ありがとうございます。

では、岡田さんに質問です。実は私は「一人一花運動」で能登に行く予定でしたが、急用ができて行けなかったんです。「なぜ能登で『一人一花』かな?」と思いまして。能登に誘致したのは岡田さんですか?そもそも「一人一花」は福岡が起源ですか?

岡田：そうです。福岡市の市役所に一人一花推進課という課があるのです。行政が主体となってやっている、まちの景観保全につなげていく運動です。私が福岡の大学に通学していたのもあって、恩師から「『一人一花』のノウハウを被災地でオリジナルに変えて、やったらどうか」という話をいただいて、一緒にやったという流れです。

小栗：岡田さんのいろんな事業はすごくグローバルです。ワールド・モニュメント財団はニューヨークじゃないですか。今のスライドも半分は英語で書いてあったから、それも関係あったのではと思います。すごくグローバルにやっているし、モデルをつくるのも全国の学生を集めてとか、SNSを利用したりとか、いっぱい力を借りるみたいなところがある。これは基本、岡田さんの発想ですか。こんなすごいの、みんなそれこそまねができない。センターというか、岡田さんにいろいろアドバイスしてくださる方をどうやって集めるのか。島田さんも同じです。堀田さんはどちらかというと1人で頑張るぞというか、すごい熱意という感じですが、島田さん、岡田さんは、どう考えても絶対に1人ではなくて、バックにチームがいるなという感じがしたのです。岡田さん、どうですか。すごいことを成し遂げていて、1人ではとてもできないでしょう?

岡田：1人では無理です。

小栗：どうやってチーム、仲間を集めますか?

岡田：「一人一花」に関しては、大学の恩師にとても尽力いただいたし、条例をつくるところでは私の友人の研究者とか、そういった方々が力になってくれて、お互に巻き込み、巻き込まれ、やってきた感じです。

小栗：声はかけても、なかなかつきあってくれなかったりするじゃないですか。うまく巻き込コツはあるのですか。

岡田：特にコツといったものはないと思います。必要性をきちんと共有することくらいでしょうか。

小栗：まずは私から質問させていただきましたが、会場からの質問をお願いします。

質問者A：丸岡さん、ぜひ教えてください。先ほど小栗先生とのやりとりの中で文化庁の雰囲気をお話しいただいたのですが、文化庁の「玄関からの入り方」をもう少し詳しく教えていただければと思います。

丸岡：具体的に言うと、「文化財は過去からの大切なものです、同時に未来につなぐものだ」というところを大前提にお話しいただけると、すごく安心できます。結局、「今、使って台無しになつたら、どうする？」ということや、「未来に向けてどうする？」というところがすごく大事で、そこにご配慮いただいて、「これから100年先もここでこの文化財と一緒に残したいのだ」というところから入っていただけするとすごくうれしいです。それと知識がないことは何も悪いことではなく、「これってどう考えればいいのですか」と聞いていただけたら、結構お伝えできることは多かったりするのです。それを聞く前から「これ、できますか？」となると、「あ、いきなり言われても、できません」となります。その瞬間に「なんでできないのですか。邪魔するのですか？」みたいになってしまいます。是非前提をお聞きかせいただけたらうれしいなというのが正直なところです。

同時に、文化庁は自治体の教育委員会さんなどを経由してお話しすることが多いので、どうしても距離があり、よけいに誤解を生んでしまう事があるのです。なので、市の方とまずはお話しいただくことが最初だと思うのですが、そのときにも

同じスタンスでお話しいただけると、とてもスマートにいきやすいと思います。

小栗：でも、そもそも文化庁さんの考えていらっしゃることが分からぬじゃないですか。

丸岡：それはそうだと思います。しかも、地域のためにと思って来てくださっているから、よけいにすれ違いが悲しい。なので、まさにこういう視点のお話をさせていただいて、文化庁側がどう考えているかをお伝えさせていただいたところです。

文化庁も最近、活用事業みたいな予算事業とかを出させていただいていまして、そこは誰でも問い合わせができる場所になっています。活用を応援するためのチームだったりするので、地域側でうまくいかないときにもここにお話しいただけると、「それはたぶん誤解があって」みたいなフォローができるかと思います。

質問者A：まずはストーリーをある程度こちらのほうでつくって、ご相談に行くというスタンスでしょうね。

丸岡：そうすると有難いです。私が現地に赴いている理由は、民側も行政側も熱意があるのに、すごくすれ違うところがあったりするので、その「かすがい」になるために行く場合もあります。何とぞご理解いただければと思います。

質問者B：堀田さんにお伺いします。非常に歴史ある建物を維持し、先ほどペイするのかという小栗先生からの鋭いご質問にもご回答いただきましたが、口コミに「非常にホスピタリティが高い」と書いてあって、来た人の喜びがすごいなと思ったので、もうちょっと値段をとってもいいのかな thoughtたりします。歴史ある建物の維持は今、堀田さんに依存する部分が大きいと思いますが、せっかくここまで築き上げられたので、今後10年、50年とさらに維持していくのであれば、どうされたいか、可能な範囲でお聞かせいただきたいと思います。

堀田：あかつき屋のシステムは、あまり考えたわけではなかったのですが、結果的に非常に珍しいスタイルになったのです。ゲストハウスというのが私はよく分からなかったのです。旅館業法の中

にゲストハウスは位置づけがないと思うのです。ホテル、旅館、簡易宿所という中で、ゲストハウスというワードが出てこないと思うので。よく一般に言われているのは、相部屋で二段ベッドがあつたり、宿泊者が集うとか、そういう傾向がポピュラーにあるように聞いているのですが。私がこの事業に着手したときに、建築家の方とかいろんな方面の人に見ていただいて、この建物の良さを非常に尊重しないといけないと。私のキャラクターも関係していると思うのですが、あまり落ち着きのない宿にはしたくないなとまず思ったので、個室にしようと。当時としては非常に珍しくて、もしかして全国で初めてではないかと思ったのですが、相部屋をつくらず全て部屋貸しにしたのです。3人泊でも、2人泊でも同じ料金です。私はお客様に喜んでもらえればいいかなと思って、できるだけ低料金でやっているつもりです。また、基本、学生さんに泊まってほしいので、学生さん向きの値段になっています。ゼミ旅行やサークルの活動で泊まれるかたちにもしたいと考えています。

質問者B：これまで維持されてきて、後継者についてどうされますか。

堀田：息子は東京で仕事をしていますので、私は自分の体の続く限りやろうと。ピリオドを打つのが70代後半なのか、80歳前後になるのか、全く見当がつきません。私はこの建物の元オーナーを知っていて、そのスピリットに大変感服していますので、もし継ぐのであれば、そういう気持ちも受け継いでくれる方に継いでほしいなと思います。ただ単に、機械的に、マネーボックスみたいなかたちで、「これはいい建物だし、もうかるぞ」という気持ちの人には継いでほしくないというのが基本的にあります。

質問者B：スピリットを大事にしたいという事業者の方々の気持ちには共感できます。しかし今、まちからどんどん文化が失われつつあり、「あの人に聞けば分かったのにね」というような話があるのはさみしいなという気持ちにもなります。それを承継していくときには、先ほど島田さんがお話ししていた、人をつくっていかなければいけない

いという部分にすごくつながってくるなと思いました。

質問者B：島田さんにお伺いします。以前から島田さんの活動を私もよく存じ上げていますが、どんどん実現してきているなど、今日改めてお話を聞けて良かったなと思います。

聞きたいことが2つあって、1つ目は、今、7年間で40店舗ほど増えたということですが、その事業をやっていらっしゃる方の居住場所は井波なのか、南砺なのか、また違うのかというのをお聞かせいただきたいと思います。

島田：はっきりと調べたことはありません。半分ぐらいは地元井波、半分くらいが南砺市内および県外と思います。私たちも取り残していた問題で、空き家が1戸あって、「お店をやってください」と誘致したとき、住む場所も一緒に準備しないと井波に住んでもらえないと分かりました。最初、お店のことばかり言っていましたが、「いや、住まいがない」と、結局、ほかのところに、砺波とかに住んでおられる方も結構いらっしゃる。住まいと店舗が揃った形で準備できれば、たぶん地元に住んでもらえると思うのですが、店舗と住まいが一緒にできるような物件がそうそうないので、歯がゆいところがあります。

質問者B：確かに店舗兼住宅なら、なおいいのかなと思いますが、そこにこだわらずかえって仕事と居住と別になっていても、長く働いてくれる、店をやってくれるのだったら、それはそれでいいという考え方もあると思います。

島田：そうですね。プラスに考えると、リスクは半分です。住まいまで一緒にしてしまうと、物件も大きくなりますので、小さなお店でスタートし、軌道に乗ってきたら住まいも見つけようというのも1つの方法だったかなと思います。

質問者B：2つ目の質問ですが、南砺市は8町村が集まって20年です。各地区でそれぞれ頑張っていらっしゃる中で、井波の活性化をほかの旧町村がそれぞれ「まねをしたいな」とか、「あそこはいいよね」とか、半分ねたみのような声もあると思うのです。市からすると、副都心ではないです

が、拠点が散在しているのをもうちょっと融合化させたいと思っていると思われます。先ほどお話をあったように、車に乗って、あっちに行く、こっちに行くという回遊性は、さすがに南砺市全体では難しいと思うのです。市全体で考えたときに、波及しそうですか。うまくいきそうですか。

島田：「井波、盛り上がっているから、それをほかの旧町村のどこでもやつたらどう？」とか言われるのですが、先ほどもお話をあったように、ストーリーも、住んでいる人も、あるものも違います。私たちはそれをシステム化して商売にしようと考えていないので、水平展開するのは基本的に私たちにはできません。

小栗：丸岡さんの「絵の具理論」ですね。

島田：そうですね。結局そういう状態であるということが1つ。あと、面的に取り組みをしないといけないという意味では、南砺市内でもいいニュースも実際にあって、空き家の問題ではなく、事業者さんが今、事業を構築しています。それこそ金沢まで40分ぐらいで行けますし、白川郷も近いでし、長期滞在してもらいながら、ゆっくりと1週間、南砺市界わいを楽しんでもらえるような仕掛けづくりは考えたいと思います。自動運転でまちなかを全部移動できるとかはすぐには難しいので、1週間ゆっくりと楽しんでもらえるような仕掛けをつくるのが今のところの作戦かなと思っています。

質問者B：確かに国内でも、日本人でも、ゆっくりとスローライフ的な遊びができるという意味で少し違う観光や滞在ができると思います。

質問者C：島田さんにお聞きしたいことがあります。散居村の話と土徳の話です。今日の資料にも土徳、柳宗悦さんの話が確かあったと思うのですが、地元やその周辺の方が当たり前と思っていても、確かに英國かどこかで宣伝されて。日本酒とか、いろんな文化とか、そこに住んでいる人も価値になっているというお話をあったと思います。外から来た人がそうした価値を見つける、場合に

よっては再定義するケースがあるかと思います。何かお気づきになった点があれば、教えていただきたい。

島田：今日の発表でなかなか伝えきれなかったのですが、外から来た人でなければ、地域は変えられないというのが私たちの考えです。井波の歴史がそれを物語っています。ただ、外から来た人だけでは変えられないので、地元の人がいかにその人たちと協力できるかがポイントだと思っています。

私たちのチーム、一緒に取り組むチームも、やはり内側の目線だけでは難しいので、移住してくれた方々が外からの目線で、一緒に議論できることによって私たちも気づかせてもらえる。チームの中に外からの目線を入れて取り組めれば、結構それで力にはなる。私たちは地元の力で頑張るし、外から来た人の知恵も利用したい。移住者でお店を出している人のほとんどは、私たちには気づけない魅力に取りつかれて来ていらっしゃるので、それをどれだけ生かせるかが重要だと思います。ただし、それに依存してしまうと、まちの人は「あの人に任せておけばいい」とかいう話になるので、そこは地元でも力を入れて取り組み、両立していければ、大きな動きが生まれるというのを実感しています。

質問者C：丸岡さんにお伺いします。「伝統と革新を融合する」という言葉をよく聞きますが、私は「革新を続けていくからこそ、伝統になる」と思っています。岡田さんの最後のほうの写真に、和ろうそくの家がありました。文化も、そこに住んでいる人、地域の特性、時代背景などがあって、どんどん変わっていくものだと思います。大きなイノベーションでなくても、不連続なものもあると思います。ご経験の中でそうしたシーンがあれば、ご紹介ください。

丸岡：まちの歴史は栄えた後廢れて、その後また栄えて廃れるなどを繰り返すもので、むしろ島田さんのおっしゃったように、人がポイントだと思

(※2) 土地の風土に根付いた、住民の信仰心や精神性、共同体意識などを指す言葉。民藝運動の創始者である柳宗悦が、富山県西部の地を評したことに由来する。

います。誰かが立ち上がるときに、こちら側の人も立ち上がるというようにタイミングが重なるのです。例えば、私の関わりのある愛媛県の大洲市では、市長が覚悟を決めたときに、ちょうど地元に帰ってきた元商社の人がいて、民間事業者もちょうど声をかけられ、そのときに銀行さんも覚悟を決めてくれたとか、何かの巡り合わせがあると思うのです。その機運が来ていなかったら、だめだというよりも、機運はいずれ来るのです。そのときにそれぞれがもう一步を踏み出せるかどうかが非常に大きいと思います。

革新し続けなければ、続いていかないというのをおっしゃるとおりだと思います。最後に、「変わらないために、変わる」と申し上げたのも、例えばお茶の文化は千利休によるものですが、現代に生きていたら、たぶんもっとおもしろいものを創っていると思います。新しいものを生み出すことは大きな価値ですが、新しいものを生み出すためには、もともとのベースがないと、やはり踏み台がなければ、高く跳べないと思います。かつての人がつくり出した茶道というものを守る人がいてもいいと思いますが、「それこそが正解だから、それ以外はやるな」としてしまったら、廃れてしまします。茶道をベースにしながら、新たなものを生み出していく人がいることが、まさに本当の意味で文化を紡ぐことだと思います。

文化を「残す」ではなく、私は「紡ぐ」だと思っています。古きよき価値は一本の筋としてはすばらしいが、そこに新しきものをより合わせて初めて強靭な糸になっていくと思います。新しき価値観として、例えば観光、ビジネス、IT、もしかしたら資金調達などもあるかもしれません。それらを駆使しながら、大切にしたいものを大切にしていくことが重要だと思います。

特に個人的に思うのは、「未来の子どもたちにとってどうか」ということで「今」を考えられると、みんなが前を向けるという印象があります。具体的に言うと、「ビジネスをやっているから、もう知らないと生きていけない」とか、行政は「自分たちのルールがあるから、限界だ」とか、

文化財は「触らないでいてくれるほどうれしい」と言っているだけだと、何も進まないと思います。思いを持った人たちがある程度集まって、「誰のためにやるのか」となったときに、「未来の子どもたちに」と言うと、みんなが前を向きやすいと思います。こうした視点も合わせてお伝えいたします。

小栗：4人の講師の先生方、いろんな討論、質問等々も出てきた中で、これだけは伝えたいということを、最後に伝えていただきて、終わりにしたいと思います。

岡田：私自身は建築士として能登半島で活動しています。能登半島は広いので、各地域、まだまだ復旧状況というか、これから復興に向けて、まだまだご支援が必要な状況が続いています。能登半島のことを忘れず、これからも気に留めていただけるとありがとうございます。

小栗：「一人一花」について一言お願いします。
岡田：「一人一花運動」、被災地にお花を植えていく活動ですが、ぜひひびきご支援をよろしくお願いします。地域住民の方たちのコミュニティガーデンとして、地域の方々がそこに集まって、お花に水をあげたり、雑草を抜いたりして、コミュニティを形成していく活動です。

島田：質問をたくさんいただきまして、ありがとうございます。発表すると、よく「これ、井波だからできるのでしょうか？」みたいなことを言われます。しかし、どこでもやりうる可能性があるなと思っています。それに踏み出せるかどうかです。自分1人で無理なら、仲間をつくってやることです。地道に足元を見ながら、いいものを探していくことができれば、時間はかかるけど、私たちは100年先を見つめていますし、先ほど言わされたように、短期的にはできないかもしれません。長期的目標で見ていくことが地域の中では大事だと思いながら取り組んでいます。ぜひ井波に今後もご注目いただけますとありがとうございます。

堀田：私の活動は孤軍奮闘のように見えるかもしれません。私自身は1人で、自分でやりたいから、やっているわけではありません。兼六大通り、兼

六園下から旭町、金沢大学の方に向かう大通りですが、2011年、開業する数年前に兼六大通りの商店街が解散しています。それから15年余り経っているわけです。私も仲間をつくって組織的な活動をしたいと心の中では思っているのですが、周りの人たちはこれから廃業しようかとか、店をやめたい、体の都合が悪いからとか、そういう人たちばかりなので、組織的なものを立ち上げるのは非常に難しいのです。

では、何が必要かというと、先ほどの方から出ましたが、まずは事業承継の問題です。これはいろんななかたちでのアプローチがあつていいと思います。最近、空きビル、空き家が結構目立ちます。この不動産をどう扱うか。金沢大学がお城の中にあった時代は、職住一体で、お店をやって、2階、3階に自分の住居があるというかたちでしたから、お店をやめてもそこに住んでいることが多々あり、物件が流動化しない足かけになっています。1階をテナントとして貸してくれれば、まちは動いていくと思っています。

やはり地域のコンセンサスと、行政がそこに問題意識を持ってくれないと、まちは動かないのではないかと痛切に感じています。立地的には兼六園まですぐ近くですし、ひがし茶屋街も近いのに、金沢の現状でいうと、観光的に非常にブランクになっている、非常にけうなゾーンだともどかしさを感じているところです。

丸岡：今日、文化財と皆さんとの距離が少しでも近づいていればいいと思います。文化財はこの世で唯一無二だからこそ文化財になっているので、どうしても文化財的な保護みたいなところがあります。もう1つは、結構行政がルールをつくることがあるので、行政の言語みたいなものが関わったりします。民間からすると遠く感じられるかもしれません。逆に言いますと、この2つを乗り越えれば、きちんと活用を進めていくことができると思います。未来に文化財を残すために、引き続きお力添えいただければうれしいです。

小栗：ありがとうございました。会場の皆さん、すてきな4人の講師の先生方とパネルディスカッ

ションができました。とても有意義なお話だったと思います。皆さんに感謝して、パネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。